

<学術論文>

『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は夢落ち作品なのか

—夢に関わる問題からアリスの二部作を読む—

金子史彦 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：不思議の国のアリス，鏡の国のアリス，夢落ち

1. はじめに

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) 著の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*) 及び『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass*)¹ は共に夢落ち作品，つまり物語の中で起こった様々な信じがたい出来事は全て夢であったということが作品の最後に明かされて収束される作品であることが当たり前の事実として広く受け入れられている²。例えばアリソン・ルーリー (2004) は主人公の少女ドロシーが現実魔法の国を冒険した後故郷に帰還する『オズの魔法使い』(*The Wonderful Wizard of Oz*) との比較で次のように述べている：

もちろんオズが書かれる前にもう一人有名な女の子がいて，魔法の国で冒険をしている。ルイス・キャロルのアリスだ。でも，わたしにも，大多数の子どもの読者にも，アリスが経験したことにはあまり魅力を感じられない。旅の途中で愛すべき友だちや仲間を作るドロシーやオズマとはちがって，アリスはひとり旅だし，彼女が会う奇妙な生きものも，よそよそしかったり，自分のことで頭がいっぱいだったり，敵意をもっていたり，いばりちらしたりすることが多い。彼らはドロシーの仲間のように力になってくれるのではなくて，むしろ理不尽な要求をする。アリスは，大声で泣きわめいている赤ちゃんを抱いているとか，あり得ない算数の問題をやれとか，淑女のようにふるまえなどと言われるのだ。大勢の読者がキャロルの代役だと見なしてきた白の騎士のように，アリスの幸運を祈っているような登場人物は一人か二人しかいない。しかも，オズとはちがって，アリスの不思議の国はただの夢だったのだ。(p. 83)

大声で泣きわめいている赤ちゃんを抱いていると命じたのは『不思議の国』に登場する公爵夫人 (the Duchess) ，あり得ない算数の問題をやれとか淑女のようにふるまえと命じたのは『鏡の国』に登場する白のクイーン (the White Queen) 及び赤のクイーン (the Red Queen) ，

¹ 以下必要に応じてそれぞれ『不思議の国』『鏡の国』と省略する。『』の付いていない不思議の国，鏡の国は作品名ではなくそれぞれの作中で描かれる異世界を指す。

² 本稿で具体的に引用したもの以外でも藤井繁 (2015)，楠本君恵 (2007)，八木沢敬 (2016)，L. H. スミス (2008) 等皆この両作品が夢落ち作品であるという前提で論じている。

白の騎士 (the White Knight) は『鏡の国』に登場する。つまりルーリーは両作品とも夢落ち作品であると見なしているわけである。

しかしアリスの冒険が結局夢であったとなると、両作品ともにアリス (Alice) がいつ眠りに落ちたのかがはっきりと書かれていないために新たな疑問が生じる。例えば『不思議の国のアリス』でアリスが最初に白ウサギ (the White Rabbit) を見た時には彼女は既に眠りに落ちていたのかどうか、つまり白ウサギはアリスの夢の中だけに存在するのか否か、といった疑問である。こういった事に関して現在日本ルイス・キャロル協会の会長である安井泉 (2013) は次のように述べている:

『不思議の国のアリス』も『鏡の国のアリス』もいずれも夢から覚めてお話が終わります。わたしたちが眠りに落ちるときには知らない間に寝入ってしまうので、その境界は意識しませんが、物語の中で夢を見始める境界ははっきりしません。気がつくとその世界に入っているというように境界線がはっきりと描かれない書き方になっています。一方、夢から覚めるところは、はっきりと境界線が引かれています。これは、わたしたちが、眠りからははっと覚めるという目の覚め方のほうがその境界はずっと鮮やかであるということを反映しているかのようです。人間の現実の生理がそのままの形で筋立てに投影されています。(p. 50-51)

確かに眠りに落ちる瞬間をはっきりとさせないほうが現実を忠実に描いているという事が可能であろう。そしてそれを裏付けるかのように両作品とも不思議な事³が起きる以前に、アリスが既に眠りに落ち夢を見ているとも解釈できる描写がある⁴。下記のように夢落ちの代表作として両作品を挙げ、まさしくそういった解釈をしているのが佐藤正明 (2014) である:

- 「夢オチ」とは、物語中で信じがたい出来事が起きて、その説明を結末で夢だったとすることであり、「枠物語」 frame story の一形態である。代表的な作品を概観しよう。
- (1) 『不思議の国のアリス』(1865) では、アリスは土手の上で読書する姉のかたわらにすわっていると眠たくなる。夢の中で白兔のあとを追って兔穴に飛び込み、不思議の国を冒険する。
 - (2) 『鏡の国のアリス』(1872) では、アリスは肘掛イスにすわって猫を相手にひとりごとをいいながらうつらうつらしている。夢の中でアリスは鏡を通り抜けて、鏡の国を巡る。

³ 服を着て懐中時計を持ち人間の言葉を話すウサギが登場することや鏡を通り抜けて異世界に入ること等。

⁴ 『不思議の国』におけるそれは“the hot day made her feel very sleepy” (Carroll 2006: p. 1), 『鏡の国』におけるそれは “Alice was sitting curled up in a corner of the great armchair, half talking to herself and half asleep” (Carroll 2006: p. 114).

『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は夢落ち作品なのか

いずれの話も、アリスの覚醒によって驚異の世界は消え去り、物語は締めくくられる。
(p. 67)

確かに両作品が夢落ち作品であることを積極的に否定する要素は無いように見える。上で述べた疑問も、安井の論にみるように、寧ろ夢落ち作品であることにリアリティを増すために敢えてアリスがいつ眠りに落ちたのかを曖昧にしたのであると考えることによって解決される。

しかし本当にこの両作品は夢落ち作品であると言い切れるのであろうか。そもそも『不思議の国』と『鏡の国』では夢の扱いが異なっている。前者はアリスが不思議の国という異世界で体験したことは全て彼女の夢であったという事実が明かされること、つまり種明かしが最後に行われ夢は話を収束する役割を果たしている。これは典型的な夢落ち作品といえるだろう。一方後者はアリスが鏡の国で体験することは彼女の夢である、ということはアリスにも読者にも早いうちから既成事実として受け止められている。しかしこれから詳しくみていくように、最後になってそのことに確信が持てなくなるのである。いわば『不思議の国』の逆、クローズド・エンディングの『不思議の国』に対してオープン・エンディングなのだ。そして両作品ともそのエンディングは夢と深く関わっている。本稿では先ず両作品の連続性を検証し『不思議の国』を前編『鏡の国』を後編とする二部作として扱われることが適切であることを証明し、次に両作品のうち特に『鏡の国』が果たして夢落ち作品であるかを検証し、その上でこの夢の扱いに関しては正反対ともいえる話が二部作として扱われることによって生じる効果を検証していく。具体的には夢落ち作品とは言い切れない『鏡の国のアリス』が出版されてアリスを主人公とする二部作を形成し、『鏡の国』が『不思議の国のアリス』の続編として扱われることにより、単一作品としては夢落ちで完結していた『不思議の国のアリス』までもが夢落ち作品とは言い切れなくなることを論じていくことが本稿の目的である。

2. 両作品の連続性

『不思議の国のアリス』では物語の最後、つまりアリスが目覚める場面まで不思議の国でのアリスの冒険が彼女の夢であることがアリス本人にも読者にも提示されない。一方『鏡の国のアリス』では冒険の途中からこれは夢であるということが何度も言及される。そればかりか稲本昭子・沖田知子 (2017) が述べるようにアリスが自分の意志で鏡の国に行ったようにすら考えられる:

『不思議』では最終章になって、アリスは夢から覚めて初めて夢だとわかり、その冒険物語をお姉さんに語る。お姉さんはこのアリスの夢物語を現実とつきあわせてその再構築を行い、さらに未来へのアリスへとつなげる総括をして、物語は終わっている。.... 一方『鏡』では、最初からアリスは鏡を通り抜けたらどうなるのかと想像し、鏡

を通り抜けて冒険を開始した。そこで夢から覚めてお姉さんに語った話は、本文のカッコの中で随時織り込まれる形になっている。(p. 231)

また稲本・沖田 (2017) は『鏡の国』ではアリスが夢を見ながらもそれを夢と認識していたと証明している:

夢から覚めると、赤のクイーンは子猫のキティであった。これは冒頭のくごっこ遊び >どおりであった。そしてアリスはキティに「お前が起こしたのね、アァ！とてもすてきな夢だったのに。だけど、一緒だったわね、鏡の国 (the Looking-Glass world) でずっと、キティ。ねエ、わかっていたの？」と語りかける。ここにも、アリスは夢を見ていたにしても、初めから鏡の国の夢であったことを知っていたことがわかる。(p. 230)

実際にアリスは鏡の国に入る前に “Let’s pretend that you’re the Red Queen, Kitty!” (Carroll 2006 p. 118) “Oh, Kitty, how nice it would be if we could only get through into Looking- Glass House! I’m sure it’s got, oh! such beautiful things in it! Let’s pretend there’s a way of getting through into it, somehow, Kitty.” (Carroll 2006 p. 119) と言っており、目が覚める前に夢の中で赤のクイーンが実際にキティ (Kitty) であることが判明する場面: “The Red Queen made no resistance whatever: only her face grew very small, and her eyes got large and green: and still, as Alice went on shaking her, she kept on growing shorter—and fatter—and softer—and rounder—and—and it really was a kitten, after all.” (Carroll 2006 p. 226-227) よりも前に、既にそれを確信しているかのように “I’ll shake you into a kitten, that I will!” (Carroll 2006 p. 225) と言っている。鏡の国での冒険はいわばアリスが望んだことが夢の中で実現し、アリスもそれが夢であることを認識した上で冒険をしていたということになる。芋虫にお前は誰だと尋ねられ “I—I hardly know, Sir, just at present—at least I know who I was when I got up this morning, but I think I must have been changed several times since then.” (Carroll 2006 p. 34) と答えたり、グリフォン (the Gryphon) とニセウミガメ (the Mock Turtle) に冒険のことを尋ねられ “I could tell you my adventures—beginning from this morning . . . but it’s no use going back to yesterday, because I was a different person then.” (Carroll 2006 p. 86) と答えた自らの状況が理解できず不安にさいなまれアイデンティティの確立に苦勞し続ける『不思議の国』でのアリスとは実に対照的である。安井 (2013) もこの両作品でのアリスの態度の相違について「鏡の国での思いがけない体験は細部に積み重ねられていきます。『不思議の国のアリス』で感じたような不安を持っていないという点で、『鏡の国のアリス』のアリスは『不思議の国のアリス』のアリスと対照的、自信を持って行動しています。」(p. 57) と述べている。また読者に対しても『不思議の国』では物語の最後にアリスが目覚める場面まで全ては彼女の夢であったということが明確にされないのに対し、『鏡の国』では “Even real scented rushes, you know, last only a very little

『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は夢落ち作品なのか

while—and these, being dream-rushes, melted away almost like snow, as they lay in heaps at her feet” (Carroll 2006 p. 171) のようにアリスの鏡の国の冒険の最中にこれは夢であるということが地の文で提示されている。

この、『鏡の国』でのアリスが自分が迷い込んだ異世界が夢に過ぎないことを認識し不安を感じず自信を持って行動していることは『鏡の国』が『不思議の国』の続編、つまり二部作の後編であると考えれば寧ろ自然なことである。『鏡の国』の中に『不思議の国』との連続性を明確に言及している箇所は無い。しかし両作品とも主人公がアリスという少女であり、彼女の飼っている猫の名前がダイナ (Dinah) であり、姉 (sister) やばあや (nurse) がおり、さらに『不思議の国』では: “Once she remembered trying to box her own ears for having cheated herself in a game of croquet she was playing against herself, for this curious child was very fond of pretending to be two people.” (Carroll 2006 p. 7) 『鏡の国』では次のように描写されているように共に主人公の少女アリスが “pretend” して遊ぶことが大好きであること等から判断して両作品は連続性のある二部作であると考えるのが適切である:

And here I wish I could tell you half the things Alice used to say, beginning with her favorite phrase “Let’s pretend.” She had had quite a long argument with her sister only the day before—all because Alice had begun with “Let’s pretend we’re kings and queens;” and her sister, who liked being very exact, had argued that they couldn’t, because there were only two of them, and Alice had been reduced at last to say “Well, *you* can be one of them, then, and *I’ll* be all the rest.” And once she had really frightened her old nurse by shouting suddenly in her ear, “Nurse! Do let’s pretend that I’m a hungry hyena, and you’re a bone!” (Carroll 2006 p. 118)

そして前者は 1865 年、後者は 1871 年の出版である事が決定的な根拠とならなくても⁵、ダイナに『不思議の国』では全く言及されていなかったキティとスノードロップ (Snowdrop) という子猫が二匹生まれていることを考えて作品の内容の時間軸も『不思議の国』が『鏡の国』より先であろう。さらに『不思議の国』はアリスの次の言葉で証明されるように 5 月の話である: “the March Hare will be much the most interesting, and perhaps, as this is May, it won’t be raving mad—at least not so mad as it was in March.” (Carroll 2006 p. 51) 。一方『鏡の国』にはアリスがキティに “I was watching the boys getting in sticks for the bonfire—and it wants plenty of sticks, Kitty! Only it got so cold, and it snowed so, they had to leave off. Never mind, we’ll go and see the bonfire to-morrow.” (Carroll 2006 p. 115) と言っている場面が有る。この明日行われるかがり火 (the bonfire to-morrow) について稲本・沖田 (2017) は以下のように説明している:

アリスが言う「明日行われるかがり火」は、11月5日のガイ・フォークス・デイ (Guy

⁵ 映画『スター・ウォーズ』シリーズのように制作・公開された順番と内容の時間軸が一致しない場合もある。

Fawkes Day) で焚かれる。これは、1605年11月5日に旧教徒の火薬陰謀事件を未然に防いだことを記念する日で、翌年からは国王の無事を感謝する祝日となり、ボンファイア・ナイト (Bonfire Night) と呼ばれる。首謀者の一人とされるガイ・フォークスの人形を担ぎ回ってかがり火で焼く風習がある。(p. 30)

この引用から推測すると、『鏡の国』は11月の話であるのだ。このようなことから『不思議の国』と『鏡の国』は内容が連続している二部作であり、前者が前編、後者が後編であると判断できる。よって異世界に迷い込みそこで遭遇する数々の超常現象が夢に過ぎなかったということを『不思議の国』で体験し免疫が出来ている『鏡の国』でのアリスは奇妙な体験を鏡の国で経験してもそれを夢と認識して落ち着いているのは自然である。寧ろそのアリスのいわば成長も『不思議の国』と『鏡の国』は連続した二部作であるという考えを自然なものにするよう作用している。『鏡の国』だけを単一作品として読むと、アリスの落ち着きぶりに不自然さを感じるのではないだろうか。しかし同作品のアリスはその前編にあたる『不思議の国』での経験を経ていると考えれば納得できる。『鏡の国』は『不思議の国』の続編として読まれてこそ理解が深まるのである。

3. 夢落ちによって収束されない『鏡の国のアリス』

『不思議の国』では異世界での不思議な現象にアリスも困惑しながら話が進み読者もそれに興奮を感じながら読み進めていくだろうが、それが作品の終わりで夢落ちによって収束される。一方『鏡の国』ではアリスも読者も夢であることを認識しているわけであるが、夢は夢でもそれはアリス自身の夢であるのかという問題が提起される。発端は作中でトゥイードルダム (Tweedledum) とトゥイードルディー (Tweedledee) による、アリスは赤のキング (the Red King) の夢の中に存在しているに過ぎないという主張である。眠っている赤のキングを目の当たりにしながらトゥイードルディーは、アリスは赤のキングの夢の中だけの存在であるから赤のキングが夢を見るのを止めたら貴女は存在しなくなる、とアリスに言う: “If he left off dreaming about you . . . You’d be nowhere. Why, you’re only a sort of thing in his dream” (Carroll 2006 p. 156-157)。さらにトゥイードルダムがもし赤のキングが目覚めましたらアリスは蠟燭のように消えて無くなると追い打ちをかける: “If that there King was to wake . . . you’d go out—bang!—just like a candle!” (Carroll 2006 p. 157)⁶。アリスはショックを受けて泣き叫ぶ。

アリスは『不思議の国』で既に夢の中で異世界体験をすることの免疫は出来ているはずであり、またこの『鏡の国』での体験は夢であることを認識しているわけであるから、今の自

⁶ この表現は『不思議の国』で “Drink me” と書かれたラベルが貼られた瓶に入った液体を飲んだことでアリスの体が縮んでいった時の “for it might end, you know,” said Alice to herself, “in my going out altogether, like a candle. I wonder what I should be like then?” And she tried to fancy what the flame of a candle looks like after the candle is blown out, for she could not remember ever having seen such a thing.” (Carroll 2006 p. 6) と呼応していると思われる。

『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は夢落ち作品なのか

分が夢を見ていることにショックを受けることはあり得ない。ショックを受けたのは夢の中の今の自分が自分の全て、つまり夢の外の自分が存在しないということに対してである。さらにアリスは自分ではなく他人の夢の中に存在しているという可能性をひどく気にしている:

There was no one to be seen, and her first thought was that she must have been dreaming about the Lion and the Unicorn and those queer Anglo-Saxon Messengers. However, there was the great dish still lying at her feet, on which she had tried to cut the plum-cake, “So I wasn’t dreaming, after all,” she said to herself, “unless—unless we’re all part of the same dream. Only I do hope it’s *my* dream, and not the Red King’s! I don’t like belonging to another person’s dream,” she went on in a rather complaining tone: “I’ve a great mind to go and wake him, and see what happens!” (Carroll 2006 p. 196)

これも容易に理解できる。自分が現在存在しているのが他人の夢の中であるならば、夢を見ている主体である自分、つまり夢の外の自分、現実の自分の存在の否定になるからである。

ショックを受けたアリスだったが、トウイードルダムとトウイードルディーと別れた後はその衝撃を忘れたかのように、平常に戻ってそのままそれまでと同じように冒険を続けている。これは不思議の国や鏡の国には常識では測れない奇異なキャラクターが多数登場するためトウイードルダムとトウイードルディーもそれらの中に埋没してしまったからではないであろうか。おまけにトウイードルダムとトウイードルディーは赤のキングの夢云々を除外しても奇異な言動ばかりするため、赤のキングの夢の問題もそういった奇異な言動の一つに過ぎないただの戯言のようにさえ思えてきてしまい深刻さが一時的にでも薄れてしまったのではないか。それを証明するかのように、アリスは赤のキングの話が終わって直ぐにトウイードルダムとトウイードルディーの荒唐無稽な戦いの準備を必死に笑いをこらえながら手伝ったりしている。そうしているアリスには、自分の存在の有無についての苦悩・深刻さは微塵も感じられない:

“Of course you agree to have a battle?” Tweedledum said in a calmer tone. “I suppose so,” the other sulkily replied, as he crawled out of the umbrella: “only *she* must help us to dress up, you know.” So the two brothers went off hand-in-hand into the wood, and returned in a minute with their arms full of things—such as bolsters, blankets, hearth-rugs, tablecloths, dish-covers, and coal-scuttles. “I hope you’re a good hand at pinning and tying strings?” Tweedledum remarked. “Every one of these things has got to go on, somehow or other.” Alice said afterwards she had never seen such a fuss made about anything in all her life—the way those two bustled about—and the quantity of things they put on—and the trouble they gave her in tying strings and fastening buttons—Really they’ll be more like bundles of old clothes than anything else, by the

time they're ready!" she said to herself, as she arranged a bolster round the neck of Tweedledee, "to keep his head from being cut off," as he said. "You know," he added very gravely, "it's one of the most serious things that can possibly happen to one in a battle—to get one's head cut off." Alice laughed loud: but she managed to turn it into a cough, for fear of hurting his feelings. (Carroll 2006 p. 159-160)

いずれにせよその後一切鏡の国で赤のキングの夢関連の問題は話の中心にはならないで終わる。

赤のキングの夢関連の論議が再び話の中心になるのは話の最後、アリスが夢から目覚めた後である。目が覚めたアリスは自分がいたのは自分の夢の中だったのかそれとも赤のキングの夢の中だったのか、赤のキングが自分の夢の一部だったのかそれとも自分が赤のキングの夢の一部だったのかを知りたくて、夢の中で赤のクイーンに変わっていたと思っ

ているキティを問い詰めるが当然答えは得られない:

"Now, Kitty, let's consider who it was that dreamed it at all. This is serious question, . . . it *must* have been either me or the Red King. He was part of my dream, of course—but then I was part of his dream, too! *Was* it the Red King, Kitty? You were his wife, my dear, so you *ought* to know—Oh, Kitty, *do* help to settle it! I'm sure your paw can wait!" But the provoking kitten only began on the other paw, and pretended it hadn't heard the question. (Carroll 2006 p. 230)

そして話全体の結びも地の文で "Which do you think it was?" (Carroll 2006 p. 230) と真相解明、収束のいわば真逆である。読者に問いを投げかけ、読者の判断にゆだねるオープン・エンドなのだ。

『不思議の国』は夢落ち作品として完結している。つまり全てはアリスの夢だったということで話全体が収束されている。しかし『鏡の国』はそうではない。既に触れたように夢を見ていたのはアリスなのか赤のキングなのかはアリス本人に対しても読者に対しても答えが出されないままで終わるのである。そしてアリスがその真実を知りたがりキティを問い詰めるが答えは得られず、話全体が "Which do you think it was?" (Carroll 2006 p. 230) という読者に対する問いかけで終わっていることは、『鏡の国』が収束されずに終わっていることを印象付ける。つまり鏡の国での体験、いや鏡の国自体がアリスの夢とは言い切れないのだ。だからと言って赤のキングの夢とも言い切れない。アリスは夢から覚めてキティを問い詰めたり、夢の中でキティが赤のクイーンならスノードロップが白のクイーン、そしてダイナがハンプティ・ダンプティ (Humpty Dumpty) になっていたのはいか等推測を行っているが、そうした目覚めた後のアリスも全て赤のキングの夢の中に存在している可能性もある。

『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は夢落ち作品なのか

究極的には『鏡の国のアリス』という作品全体が赤のキングの夢であるという可能性すらあるのだ。

前章で『鏡の国』は『不思議の国』と異なり、アリス自身が異界での冒険が夢であることを認識しているばかりか地の文で、つまり作者の言葉による説明としてこれが夢であるということが言及されていると述べた。しかし、それらはミスリードであったとすれば納得できる。なぜなら同作品の結びの“Which do you think it was?” (Carroll 2006 p. 230) もまさしく作者の言葉だからである。読者にこれは夢落ち作品であるという確固たるいわば安心感を与えておいて作品の最後にそれを打ち砕くどんでん返しを持ってくる形式である。また前章で地の文で夢であることが言及されているものとして引用した“being dream-rushes”は夢とは明言しているが誰の夢であるかは明らかにしていない。アリスの夢でなく赤のキングの夢であることを指していたとしても何ら矛盾は生じない。もしキャロルがそれを考えて意図的に所有格のついてない“dream”という言葉を出したのならまさしくミスリードである。さらに『鏡の国』がまさしく夢落ち作品である『不思議の国』の続編として読まれることで読者に与える「これも夢落ち作品である」という予測はより強化され、それ故ミスリードの効果も上がることになる。

4. 『不思議の国のアリス』は『鏡の国のアリス』と好対照をなす夢落ち作品か

『鏡の国』は“Which do you think it was?” (Carroll 2006 p. 230) に代表される最後の場面によって話全体の意味が変わってしまう。それまで『不思議の国』同様の夢落ち作品でアリスが夢から覚めて現実に戻る、いわばアリスの異界で見たり体験した超常現象は全てアリスの夢として片づけられ話が収束すると思われていたものが、話全体が赤のキングの夢である可能性が出てくるからである。アリスの夢なのか、赤のキングの夢なのか、アリスは赤のキングの夢の中にしか存在しないのか等々、これらは永久に解明されない謎として残る。もし話全体が赤のキングの夢であれば、彼は今でも夢を見ていることになろう。これでは純粋に夢落ち作品とは呼べない。

面白いことに『鏡の国』は『不思議の国』と正反対の構造になっている。『不思議の国』はアリスも読者もその異界の超常現象が夢だとはわからずに話が進んで行き特にアリスは自分が何者であるのか不安にかられる場面が多いが、話の最後で夢落ちという形で全てが収束する。つまり混沌から始まり秩序で終わるのである。『鏡の国』は本稿で見えてきたように秩序から始まり混沌で終わるのである。

このように『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』は好対照をなす作品である。しかしそれは第二章でみたような数々の両作品のつながりを無視し、『鏡の国』を『不思議の国』の続編と考えず、それぞれを独立した単一作品として読む場合である。そして主人公が共にダイナという猫を飼っている“pretend”遊びが大好きなアリスという少女であり、『不思議の国』と異なり『鏡の国』では初めからそのアリスが不思議な事が起きる異世界を夢だと認識していること等から考えて両作品は連続した二部作であり『鏡の国』は『不思議の国』

の続編と考えることが適切であろう。そうすると『不思議の国』は『鏡の国』と好対照をなす夢落ち作品とは言い切れなくなる。アリス自体が赤のキングの夢の中にしか存在しないということになればそれは『鏡の国』だけでなく『不思議の国』にも関わってくる問題だからである。つまり『不思議の国』の話全体が『鏡の国』同様赤のキングの夢であるという可能性が否定出来ない。

5. おわりに

本稿の検証で明らかになったように『鏡の国のアリス』は純然たる夢落ち作品とは呼べない。一方『不思議の国のアリス』は純然たる夢落ち作品である。しかしそれはこの両作品をそれぞれ独立した単一作品として見た場合である。『鏡の国のアリス』が『不思議の国のアリス』の続編、二部作の後編のようなものであり両作品の主人公であるアリスが同一人物と考えられる以上、本稿で論じてきた『鏡の国』の特質、つまり「この作品全体が赤のキングの夢でありアリスはその中にしか存在しないという可能性もあるため純然たる夢落ち作品とは呼べない」ということから『不思議の国』も無影響ではいられない。『不思議の国のアリス』という作品全体が『鏡の国のアリス』と同様に赤のキングの夢である可能性を否定することは出来ないのだ。もちろんそうではない可能性もあるが、いずれにせよ解明できない。よって『不思議の国のアリス』も純然たる夢落ち作品とは呼べないということになる。『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』は連続性のある二部作であり話の時間軸は両作品が出版された順序と同じと考えるのは本稿で検証してきた通り極めて説得力のある考えであり、そうするとこのアリスの二部作は混沌から始まり一時は秩序が確立されたように見えたが結局は終始一貫して混沌であったということになる。『鏡の国のアリス』が続編として出版されたことにより『不思議の国のアリス』も夢落ちで収束させることが不可能になってしまったのだ。“Which do you think it was?” (Carroll 2006 p. 230) という言葉は『鏡の国のアリス』のみではなく、『不思議の国のアリス』と合わせた二部作全体を視野に入れた問いなのである。

文 献

稲本昭子・沖田知子 (2017) 『アリスのことば学 2』大阪大学出版会。

Carroll, Lewis (2006) *Alice's Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass*, New York, Bantam.

楠本君恵 (2007) 『出会いの国の「アリス」——ルイス・キャロル論・作品論』未知谷。

佐藤正明 (2014) 「……そしてアリスは目を覚ました——夢オチの構造と役割」『ミッシュマッシュ』No. 16, p. 67-73.

スミス, L. H. (2008) 『児童文学論』石井桃子, 瀬田貞二, 渡辺茂男訳, 岩波書店。

藤井繁 (2016) 『ルイス・キャロルとノンセンス文学』コプレス。

安井泉 (2013) 『ルイス・キャロルハンドブック——アリスの不思議な世界』七つ森書館。

ルーリー, アリソン (2004) 『永遠の少年少女』麻生九美訳, 晶文社。

(2019年 8月 7日 受付)

(2020年 2月21日 受理)